Osaka University Knowledge Archive

Title	中世楽書と説話伝承に関する研究
Author(s)	高原, 香苗
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41326
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏　　名	高原香苗（たかはらかなえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　14313　号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	**中世楽書と説話伝承に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　天野　文雄　　助教授　荒木　浩

論文内容の要旨

中世の文学において，和歌や仏教といった視点からの研究がさかんになされるものの，当時の社会において大きな役割を果たしていた音楽については，やや等閑視されてきたきらいがある。音楽によって宮廷や寺社に奉仕し，それを専門とする楽人たちによって著されたのが楽書であり，そこには楽器や楽曲に関わる伝承，演奏の故実，楽人にまつわる伝承，演奏にともなう奇瑞等，説話文学と重なりながらもまた独自の世界を形成する。それらの楽書を通じて，中世の文学史に新しい視点を導入するとともに，楽書を体系的に位置づけようとするのが本論文の目的である。

全体は，第一編「中世楽書の基礎的研究」として二章，第二編「中世楽書と説話伝承」として三章，さらに巻末に2篇の資料を付した。400字詰め原稿用紙にして本論は約360 枚，資料編は70枚ばかりからなる。

第一編第一章は，中世楽書の集大成ともいうべき『體源鈔』の伝本調査と整理であり，68本を対象とし，詳細な書誌とともに分類をし，原本の復元を求める。第二章では『舞曲之口伝』の伝本，成立とともに，『體源鈔』の生成過程をも明らかにする。

第二編では，個々の楽書と説話伝承について，『名器秘抄』『舞楽雑録』を取りあげ，伝本，成立，『教訓抄』とのかかわり，中世物語への展開などを論じていく。『名器秘抄』が『糸竹口伝』を継承しながら，『古事談』や『平家物語』を吸収していった意義，それによってできあがった作品の位置づけをはかる。『舞楽雑録』は『教訓抄』の舞曲を中心にしてまとめながら，またそこには語られなかった秘伝も記されるとする内容の考察とともに，中世物語『環城楽物語』の源泉としての役割の存したことを考証する。

論文審査の結果の要旨

中世楽書と称される資料が存するものの，その研究は一部の日本音楽史の専門家の手に委ねられ，文学研究者は目の及ばない分野としてなかば放置された状態にあり，まして膨大な分量の伝本調査や書誌，個々の楽書の相互関連などといったことになるとほとんどなされてこなかった。申請者は，中世社会における音楽の重要性に鑑み，そこに埋もれた資料群から，中世文学史に新たな視点を導入しようとの意気込みで，徹底的な文献調査からはじめ，それによって数々の新資料の発掘，物語や説話文学とのかかわりを明らかにしていった点は，大きな功績といえよう。とりわけ，

『還城楽物語』について『教訓抄』との関連が指摘されてはいたが，それ以上に『舞楽雑録』との緊密性を考証し，楽書で伝えられた還城楽説話が，中世小説（物語）や幸若舞曲に流れ込む具体的な様相を明らかにしたのは，注目すべきである。しかも，『舞楽雑録』が南都で成立した可能性を説き，そこから幸若の『入鹿』の形成と結びつく必然性，新たな中世作品の発生源として位置づけるなど，まさに中世文学史を見直す端緒にもなってくると思われる。

文学研究の実りある進展のためには，歴史や思想史はもちろんのこと，美術史，仏教，神道，芸能等の研究とも密接にかかわりはするが，ここに楽書の分野も不可欠な存在であることの基本的な道筋を提唱し，その実践を示した意義は貴重である。ただ，『體源鈔』の詳細な調査と伝本の整理はすぐれた成果であるにしても，そこから文学作品への展開や文学研究への有用性にはまだいささか径庭があり，本格的な研究は今後の課題でもあろう。新しい資料の発掘，楽書から展開する中世文学の形成や読み，中世における注釈史や古典研究へ果たす役割など，大いに期待したいところである。

このような次第で，本論はきわめて構想力に富み，意欲的な内容だけに，学界に裨益するところは大いなるものがあるであろう。本研究科委員会は，本論文を博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。